

〔研究ノート〕

人間間の意思疎通と組織能力

—ルーマンのコミュニケーション論研究序説—

影山 僖 一

はじめに：困難を極める意思疎通

人間の生存にとり必要不可欠な衣食住の確保は人間間の協力による労働によって確保される。そうした衣食住を中心に人間生活にとって他人との相互協力と理解とは基本的に重要な活動である。人間同志の協力の成果として、すでに多様な産業が登場し、活躍して人間の生活を支援している。しかし、人間間の意思疎通（コミュニケーション）の在り方についての解明は遅れている。ここでは社会学者であるルーマンの発想を紹介して、コミュニケーション解明の一助とする。

(1) 困難な人間同志の意思疎通と協力関係

人間相互の協力関係の役割は、誰もが常識として一応は理解していることではあるが、こうした協力の前提をなす人間間のコミュニケーションということが人間にとっては意外に難しいことであり、その成立原理を克明に深く探求した研究は極めて少ない。それは、生物としての人間の持つ自己中心性と自己完結性という特性が大きな障壁をなすものである。多くの人々が慣習として他人との話し合いや人間関係は自動的かつ円滑に行なわれるものと前提している。しかし、人間は自己中心的で他人との協力を好まずに、個人として孤高な行動を推進するものである。本来的に人間は自己中心性と自己完結性という性格をもっている。いわゆるオートポイエーシス（APE）という生物特有の性格である。だから、自然に人間同志が仲良くなり、コミュニケーションを自動的に遂行して、コミュニティを形成して、円滑な共同生活を送るものと考えすることは出来ないし、他人とのコミュニケーションも円滑には進行しないことが多いのである。

最近になって、マスコミなどでも不登校の学生の多いことと、中高年者のひきこもりが多数に上がることが報道されて、世間を驚かせている。こうした人間の自己中心性と自己完結性を総称してオートポイエーシスなる言葉でルーマンが表現している。継続して、ルーマンは、コミュニケーションを行なう場合の人間の姿勢についても細かい解説を試みている。さらに、コミュニケーションもオートポイエーシス的になされるということを実証している。世間の常識に比較して極めて厳格に人間間の意思疎通と協働作業の困難さを訴えている。こうした社会システム理論の提案は、一考に値する重要事項とみられる。

(2) 人間間における協力関係の困難さ

そうした人間の複雑な意思疎通にもとづく労働活動を支えてきたのが、人間間の協力関係である。すなわち、そうしたヒトとヒトとの間の協働作業を推進してきた重要な手段

が、労働者間の意思疎通と意見交換である。そこには人間相互のより良いコミュニケーションの推進により、人間の間でのより良い協力関係が推進されてきた。人間間のコミュニケーションは人間の生活にとり最も重要な労働過程を初めとして、人間の生活にとり不可欠の意義を有する活動の基盤をなすものとなる。しかし、そうした人間にとり最も貴重な意義をもつとみられるコミュニケーションの役割が必ずしも、従来は、十分に解明されてきたわけではない。

そこで、本稿では、コミュニケーションの意義をルーマン社会学の発想を敷衍してさらに詳細に観察するものとする。そうした複雑なコミュニケーションの本質を確認したうえで、従来の常識とは異なる観点から人間の労働過程における理想的形態を観察するための前提条件となるルーマンの発想を紹介する。特に、より高度な形態の生産性の向上や技術革新を通じた労働過程を求められるコミュニケーションの性格を検証していくための基盤を提供したい。

(3) 意思疎通が協力の前提条件

人間の間における正確で真実のコミュニケーションを推進するものは、正しく他人を理解する方式と具体的な人間の所属する組織の意見交換の方式、そして、社会における人間の行動を縛ることのないシステムである。本稿で解説の目的とする正しいコミュニケーションの解明に至る目標は以下の三点にある。

第一は、人間間の究極の意思疎通（コミュニケーション）の在り方に関する解明が待たれる。ルーマンは、究極に近いコミュニケーションの在り方の解明を意図している。本稿は、そうしたルーマンの意図を再現するための初歩的な試みを行っている。

第二に、人間の所属する具体的な組織におけるリーダーの言動を含めた意思疎通の方式が課題となる。日本人は組織における他人の言動を過度に付度するとされている。その理由と解決方法の解明が待たれる。そこでは、組織の命令系統の在り方が解明されるべきである。人間の構成する組織の成立原理と人間を拘束する命令機構と意思決定方式の解明は未だ闇に包まれており、解明の手がかりも与えられていない。

そして第三点は、ハーバーマスの指摘する官僚制度や経済力、資本主義という外圧が如何に人間の生活と活動を苦しめてきたかの解明である。それは、人間の発想や行動に制約を加えているのみではなく自由な意思疎通にも大きな制約を課してきた。社会における個人の言動や生活を左右する重大な課題となってきた。これら三点の解明により、ようやく人間社会の成立原理と人間の人権の本格的な開放に向けた準備がなされるものとみられる。

これら三点の解明なくしては人間の言動の真の説明はありえない。本稿は、この第一の難関を克服すべく着手された試論的な試みと位置付けられる。

(4) 筆者の能力不足で解説書頼りの研究に留まる事

せっかく着手したものの、残念ながら、筆者の力不足で、ルーマンの原著を十分に読みこなすことなく、ルーマンの解説者による所見にすがって本稿を構成することとなった。そこで本稿は残念ながら研究途上にある研究ノートとして掲載をさせて頂くものとした。

なお、本稿では、人間間のコミュニケーションの社会性を確認した上で、労働過程などの人間間の協力関係の在り方の理想型を探求する基盤を提供するものである。いしかえれ

ば、本稿で指摘する意思疎通方式は、人間の本質とか日本人の特色、また、飛躍的な向上を期待した労働形態の在り方の特色を探求するための前提条件をなすものとなる。

第1章：ルーマン社会学の特色

ルーマンによる社会理論は、人間を重視し、人間を中心とする社会のシステム性と個人の自由な活動を重視するということを明確にした学説である。そこでは、現代社会のシステム性を評価するとともに、今日では高度に複雑なシステムが形成されている現実の社会システムの把握と解明に力が注がれてきた。さらに、個人の自由な言動が多く分野で少なからず浸透していることも重視している。社会の複雑性、システム性を重視し、さらに、そうした中での個人の自由がある程度は浸透している事実を強調する。逆に、そこでは、多くの制約に苦しめられている国民も多い。そのギャップには多くの国民の強い関心が寄せられている。社会のシステム性と個人の自由な思想と活動とそれにかかわる多くの矛盾と問題点を解明し、人間にとっての本来の自由を獲得する方式を解明したいと考えた上で問題提起であるといえよう。

1：社会と人間個人の関係性

ルーマンの発想による社会システム論とコミュニケーション理論の特色は以下のように指摘される。

(1) 人間相互が社会の環境を形成すること：複合的社会システム

人間は社会の一部ではなく、社会における環境の一部を構成する重要な部分であるものとみるのがルーマン学説の特色である。人間は、社会の価値や規範に対して対応するために形式的にはそれ相応の自由を有する。

(2) 論理的整合性のある社会理論システム

論理的整合性をもつ社会学理論をルーマンは信奉している。社会的なシステムに関する普遍的な理論を構築して、ルーマンは、社会学の学問分野として人間と社会との関係の統一性を確保してきた。

(3) 社会の複合性探求

従来の社会科学は客観的な存在論的な思考から脱却できずに主体の呪縛から逃れられずにいる。近代的行為理論の限界はそこにあり、複合性と飛躍的な変動性を捉えきれないところに問題があるものとみられる。そうした理論的空白を埋めるためにルーマンの社会システム論とコミュニケーション理論は大きな寄与をしてきているものとみられる⁽¹⁾。

2：組織の本質と問題点：個人の活躍に対する期待と制約

生物は、群れをなして生活するとされている。グループは、人間にとって大きな環境であり、そこから人間も社会性を獲得して、集団の中の個人としての修業が積まれる。人間は生物の一種であり、人間関係からは離れられない。しかし、近年には、こうした集団に

よる人間関係の学習方式に大きな問題が発生している。それは、人間個人が組織の奴隷としての隷属性を強めていることである。個人が組織の奴隷となりつつある現実を探求して、その解決策を提示することが重要な課題となる。さらに、人間は形式的には集団的な行動をしているが、本来は孤立性が強く、自己中心的で自己完結性が強力であるという性格が確認されている。いわゆるオートポイエーシスとしての人間がいかに他人と協力して社会性を強めるのかという問題がある。それは、人類の解放にとり極めて重要な課題である。また、それは、個人としての組織からの独立を目指すための大きな提言であるが、ここでは人間個人が組織から受ける制約に関する問題点が特に指摘される。

(1) 生活のための個人による組織の利用

ヒトは、生活のために組織に参入し多様な活動を余儀なくされる。生活のための組織参加とそこでの組織による制約があり、多くのヒトは組織の中心人物になるための自己犠牲と欺瞞、裏切りなどを繰り返して、一部のヒトは権力を手中にする。権力を獲得した後は、権力の拡大のためにテクノクラートとして、組織の中で他人に対する抑圧の操作に没頭する。情報操作の繰り返しや地位を利用したメンバーに対する恫喝により、人間は、権力を強め強大な権力を手中にするが、それは、権力の代理人であって、自己の利益を優先することにより、世間を裏切り、また世間から仕返しを受けることとなる。権力の永遠の獲得は困難を極める⁽²⁾。

(2) 個人に対する圧力

そこでの最も大きな問題は、個人生活における家庭という基礎集団の利益が一家の働き手としての個人の行動に対する大きな制約要因となることである。さらに、組織の中では、官僚化が進展して、組織構造の硬直化が発生する。それは、官僚組織のみではなく、人間の組織全般に共通していえることである。

官僚の主導権が行き過ぎると、社会組織全体に大きな問題を発生させる。判断の主体と責任不在が起り、組織と個人との軋轢が発生する。特に、こうした制約の多い組織の中での人間の言動が蓄積されて多くの組織人がストレスを抱えて、人々を苦しめることが多いのだ。

(3) 個別組織とそこでのコミュニケーション

個々のケースからいえることの一つは、個人を制約する多くの組織や言動の中で、特に大きな意味を持つものは、個別の組織、集団と家庭である。人間の所属するこれら個別の組織が人間の判断基準と思考や言動に対して極めて大きなインパクトを与えてきた。個別組織と家庭の研究が今後は極めて重要な社会制度研究の対象となり、かつ、そこでの人間のコミュニケーションの在り方も大きな意味をもつものとなる⁽³⁾。

第2章：自我と他我による自己準拠：社会システムとの関係

ルーマンは社会システム理論と概念の革新を意図しているが、一般の社会学者の理解を得られない事が問題だ。その理由はいくつかある。実社会では複雑な出来事は同時に進行していることと、その解明が困難であることだ。そのうえ、ルーマンの学説が他の社会学

の概念とはかなり異なるものであることにある。とくに、人間の意識を社会システムの環境として捉えることが問題だ。また、システムは自らで自らを維持する統一体であると考えていることである。自我と他我との関係性と自己準拠に基づく他我の類推とその上で一つの活動を起こして、他我の反応をみきわめつつ、それを基盤としての自我の活動を重ねていくという発想がある。そうした活動の相互作用を積み重ねて、他我を理解することにつきるということになる。自我の類推した他我の活動は、自我の一方的な思い込みに終わることもありうる。あるいは、自己準拠に基づく類推が正しくないこともありうる。ともかく、自我と他我の対応の連続が意味のあるコミュニケーションの成立に不可欠となる。その際に、自己の徹底的な観察がなされて、自己準拠が確認されるものとなるという⁽⁴⁾。

(1) 自己準拠と社会観察

ルーマンによれば、社会的なものは個人の意識のみに還元できないという。しかし、自我の経験は社会的なものの自己準拠を経験すること以外の何物でもない。自己準拠というオペレーションは意識という形式でのみ遂行されているのではない。社会的なものは、それに特有の形式で自己準拠的オペレーションを営んでいるために個人の意識のみに還元されえないものであるという。

(2) 自我と他我の相互依存性

意思疎通は、人間 A と人間 B との連関過程である。それは、自我と他我との相互依存性と連鎖的対応関係ともいえる。人間の言動は、相手の反応を見ての活動、相互の自己準拠性とその理解の連続的な反応の連鎖、相手との相互依存性の成果となる。絶えざる相互配慮の結果で相互作用の成果がきまる。意識、身体、物質などなどという要因に加えて、A と B との間の選択連関がどのように接続するのかが不可欠の原因として作用している。選択連関がどのように生起するのかを規定する要因の領域が当の選択連関の自己準拠的な継起が継続されることを通して、他に還元不可能な独自の領域として生み出されるものとなる。

(3) 他我観察と社会システム

相手の反応により自己の行動を他の連関システムに連動させることも重要となる。一方の行動が他方に作用して、それを多少の量的なインパクトを及ぼすことにより継続的なコミュニケーションが整理されている。そこでは相互にインパクトを与えていることに意味がある。互いに相手を他者として扱わざるを得ない人々が、どのようにして相手の選択活動に自らの選択活動を接続させているのかという問題を、ルーマンは、自他の選択活動の連動という事態における自己準拠を手掛かりとして考察する。要するに、自己準拠の過程において、他者の意識に配慮することとそうした過程を繰り返すことこそ、社会システムを成立させる要因となる。

(4) 自我のオートポイエーシスと社会システムとの関係性

社会システムの自己再生産についてルーマンが語る場合には、そのシステムを結果として産出した原因の全てをも当のシステムがコントロールしていることが見出されているわけではない。ある社会システムは関与者の意識及び身体、コミュニケーション、空

気、音波などなど無数の原因の作用の結果として生み出されている。社会システムが把握しているのは、そうした原因の一部に過ぎない。だが、それはそのシステムの環境だけに還元しえない原因なのである。こうした原因を当のシステムが統御しているという意味で社会システムは自らを自らで産出しているのだという解釈が出来る。

社会システムは、コミュニケーションという要素の再生産を通して、自らと環境とを区別し、みずからを再生産する。ルーマンは、このように要素の再生産に焦点を合わせてシステムの再生産をいいあらわす概念としてオートポイエーシス (APE) という概念を用いる。そのシステムを成り立たせる要素はそのシステムそのものによって再生産されるシステムをオートポイエーシス的とよぶこととしたい。

そうしたシステムを統一体として用いているもの、すなわちそのシステムの要素、過程、構造、システムそのものは、そうした統一体によってシステムの中で初めて規定される。このシステムは、その自己準拠的な構成を通して統一体たりうる。ルーマンはこうした要素における自己準拠を基底的自己準拠と呼んでいる。

(5) 社会的なものとの関係性

ルーマンからすれば、社会的なものはまさしくシステムという概念を適用しうる対象にほかならない。互いに相手を他者として扱わざるを得ない人びとが、このように相手の選択活動に自らの選択活動を接続させているのかという問題を、ルーマンは自他の選択活動の連動という事態における自己準拠を手掛かりとして考察する。その帰結として関与者の間の選択連関の自己準拠的な継起がシステムとして把握されて関与者も意識や身体がそれにとっての環境にほかならない事が明らかにされる。

第3章：観察と理解：徹底した理解活動

自己閉鎖性の人間にとり、相手の考え方や意見を推理して、相互理解を促進するためには多くの方式で他者の発想、意見を深く理解して推理を重ねることが必要不可欠である。そのためには、相手の発想を推理し、しかも一定の仮説を立てたうえでの相手の考え方を理解することが不可欠となる。それは、社会的なるものの連続性を確認する作業に取り組んでいるものといえる。

現実には個々の心理システムが独立した中でオペレーションの閉鎖性により、一方が他方の思惑を、また双方が同時に相手の心理を見渡すことができないという厄介な現実がある。そこで当事者双方が人間関係においてさしたる不都合を生じさない程度に相手の意向を想定し、理解することが可能か否かということが問題となる。相手の意向を先方を傷つけない程度での深い観察に向けた努力で確実に理解するという行動が不可欠なのである。それは、社会の創発を考える際に端緒となる大問題でもある。相手を理解することがコミュニケーションという課題の前提となる重要事項である⁽⁵⁾。

従来は行為と行為との連関でコミュニケーションが生み出されるというのが社会学の常識となる発想であったが、それとは反対にコミュニケーションにより初めて行為が行為として構成されてゆくとの発想をするのがルーマンの特色ではないかと考えられる。そのため理解促進こそが社会生活の出発点となるというのがルーマン独特の考え方となる⁽⁵⁾。

要するに、行為が別の行為と連関することでコミュニケーションが生み出されるという一般の発想をルーマンは採用しない。それとは逆に、相互の理解が先行してコミュニケーションの前提が成り立ち、それによってはじめて行為が業績として構成されるという立場をとる。行為を観察して、それに多くを依存して他者の理解を深めるとというのが、これまでの常識的な発想法であつたものとみられる。ルーマンは理解を深めることで初めてコミュニケーションが正しくなされるということとなる。相手の立場や発想の理解があつてはじめて正しいコミュニケーションが成立するということになる。そこで初めて正確なコミュニケーションが成り立つという考え方に特色があるようだ。はじめに理解ありきであるといえるということだ⁽⁶⁾。

(1) 他我のシステム理解と自己準拠への配慮

そこでは、観察されるシステムがそのシステム自体をその環境とその環境との差異においてどのように取り扱っているのかが問題となる。このことを理解する側が相手を克明に観察することが前提となる。理解される相手が自らの環境をどう考えているかを考慮に入れて相手の発想を観察することが理解にとっての大きな課題となる。他人の考え方が十分に解らないときには、相手を理解することがまずは必要となる。

(2) 観察のヒント：相手のシステム環境の中での自我の位置付け

観察に際しては、理解する側の特別の種類を観察たとえば二項図式などが考えられる。理解しようとしている自我は、自分自身をそのもう一人の自我からみたもうひとりの自我であるとみなすことになる。理解するシステムは自分自身を相手のシステムの環境の中に位置付けることが肝要である。理解しようとしている自分を含めたシステムはそのシステム自体を理解の対象となる相手のシステムの環境の中の一システムとして取り扱う。換言すれば、理解している自我が、そのシステム自体を、理解の対象たるシステムの環境の中の一モメントとして経験しているといつてよい。

(3) 理解をめぐる自我と他我の振動

理解しようとする自我が自我とされる他我との関係では振動がある。両者の間の擦れ違いである。理解するための相手のシステムは、自らが理解の対象となっているシステムによってどのように観察されているのかを観察しなければ、相手の振る舞いを理解することはできないのである。

そこでは、理解する側と理解される側との相手に対する連関が問題とされる。それを相互の理解過程の固有の流動性、一種の振動とよぶ。こうした双方の振動の相互作用こそ理解をめぐる問題状況の特徴といえよう。こうした自己準拠システムによる行為とか振る舞いを理解することは、自然現象の理解とは異なるものとなる。相手が固有のパースペクティブを有したシステムであることを考慮に入れることなしにおこなわれる観察の場合には、このような振動はみられない。

理解というものは、自我、他我の関係性の中で初めて可能となるものであり、理解する側の自我だけの懸命の努力だけでは成り立たない。理解がコミュニケーションにおいて初めてなりたつものである⁽⁷⁾。

(4) 正確な情報発信と受信者の理解力向上

移転の媒体によるコミュニケーションの把握について、ルーマンは以下のような考え方を排除する。すなわち、ニュースが送り手から受け手へと円滑に移転されているという考え方である。そうした単純なことではなく、より一層複雑なプロセスを想定することが求められているというのだ。

第二に強調するのは、情報の移転では、発信者による発信の方法も大きな問題となる。また、受け手の対応の仕方で正しい処理の仕方が決まるといえる。受け手の理解の仕方が正しくないと情報の伝達が不可能となるというのである。

第三には、送り手と受け手の情報の意味と内容の理解にへだたりのある可能性である。そうしたへだたりに対する理解が求められている。

(5) 三極の介在効果と情報移転

かくて、正しい情報の送受には二極ではなく、第三極の介在が必要だという。情報は多くのレパートリーの中の一つの選択である。システムの中の一つに過ぎない。すなわち、大きなコミュニケーション・システムの中の一つの選択である。伝え手の態度で情報は間違っただけで連絡されることになることはわれわれが日常に体験する事実であり、留意すべきことである。情報の選択制がコミュニケーションにとり極めて重要なものとなるということとなる。とくに、受け手にとっても情報の理解が重要となる。受け手が情報の性格を理解しない場合には、正確な情報発信も受信者にとり正しい情報の理解とはならない。受け手の情報に対する理解が大きな意味をもつというのである。情報は、送り手、受け手の意識の一致が意味をもち、さらに第三者の支持を得ることが必要となる。

(6) 相互理解と相互浸透

互いに相手の考え方が不透明であるなかで、相手の心理が不透明であることを前提として、如何にして両者の関係が成り立つのかという問題にも配慮すべきである。そこで、両者の情報授受に関する正しい関係が成立するために必要な程度に事前の十分な理解を進めることが肝要だとしている。一般には、発信する側の意図が正確に受け手に理解されることは希である。しかし、そうした相手の不透明さを多くの事実から推理して理解に努力することが求められている。理解ということは実は大変に難解な問題である。

第4章：構造カップリング：相互理解と共鳴

コミュニケーション過程における理解に関しては、1980年代には、ルーマンにより構造カップリングという概念が提示された。それは、二つの閉鎖的で自律的なシステムが相手のシステムの環境条件を造り出すというような関係性のことを指す。相手からは情報は受け取らないという意味で、双方は閉鎖的な関係にある。しかし、相互のシステムが互いの環境条件になつているという意味で両者は相互依存的な関係にある。そこでは、他我は自我にとりあくまでも環境条件に過ぎない事の確認が重要である。自我があくまで他我を徹底的に観察し、他我の徹底的な理解を深める活動が求められている。それが、本格的なコミュニケーションの前提となるものである。

さらに、従来は、コミュニケーション・システムが主として人間の意識の問題に限定されていたが、ルーマンは、それを拡大して、コミュニケーション間の問題にも拡大している。すなわち、人間の意識をコミュニケーション間の関係性の問題に発展させている。これらが構造カップリングの課題となる。そうした概念の理解には以下の四点が特に重要事項となる。

- (1) 自己中心的で自己完結的、かつ自律的なオートポイエーシスによる環境との係わり方とコミュニケーション：相互浸透の作用
- (2) 外部との係わりと外部からの刺激への対応：期待と期待の変化による刺激と自律的意識内容の転換
- (3) 共鳴、期待、刺激による間接的意思疎通システムの変化
- (4) 人間の意識とコミュニケーションの理解、意識と心理システム

発信者と受信者との情報に対する正確な理解を相互浸透という言葉で表現されるということも注目すべき大問題となるようだ。そこで、最近では構造カップリングという概念を用いて、当該問題を解明することもある。さらに、社会システムと心理システムのオートポイエーテック（自己中心性）のシステムとして互いに他方に関係することが出来るとするルーマンの発想もある。そうしたルーマン理論の解明こそは、近代における社会と個人の解明をもつてその基本的課題とする近代の社会学にとっての重要な概念の中心となるものであるといえよう。相互の考え方に関する克明な理解と自己の発信に対する回答まで予測した行動は相互理解にとって大きな助けとなるものである。

ルーマンによる社会システム理論の特色とされていたものは、自己準拠的システム概念を軸としていたが、さらに新たに社会システム理論を見直すことが課題とされていた。そうした過去の狭い概念規定から、ルーマンは生物学者マトラーナなどの概念を応用してオートポイエーシス概念を導入して要素レベルの自己準拠を考慮しうる徹底した自己準拠的社会システム理論の構想を目指すこととなった。コミュニケーション・システムをオートポイエーシス・システムとして定式化するということは、意思疎通の方式が徹底的に閉鎖システムとして自律的なシステムとして把握されるということとなる。そこで、コミュニケーション・システムが自己準拠的に閉鎖的なシステムであるならば、そのシステムが環境と如何にかかわるのかという問題に直面することになる。双方は相互浸透の関係にある。

(1) 意思疎通システム：問題提起

意思疎通システムとしては、過去にルーマンは相互浸透、共鳴、自己準拠、さらには理解という概念を提起していたが、1980年代後半には新たに構造カップリングという概念を提起した。過去における人間間の意思の相互浸透については、意思疎通と人間（とりわけ、意識システム）との関係を把握しようとしており、また、共鳴に関しては、エコロジー問題を背景として、コミュニケーション・システム（とりわけ、諸機能システム）が固有の構造を通して環境の出来事に反応できるものとして提起されてきた。1980年代の後半には、これら二つの概念に代わり、構造カップリング概念がシステム、環境関係をめぐる主要概念としての地位を占めるものとしてルーマンにより提起された。その意義は、相互浸透概念がコミュニケーション・システムと人間の関係という異なるシステム類型間の関

係ばかりではなく、コミュニケーション・システム間の関係において積極的に展開されている。

また、それぞれのシステムがそれ自体の構造にもとづいて環境の出来事に反応するという共鳴概念が担っていた課題にも構造カップリングが行うシステムの内部で生起している刺激及び刺激を甘受する能力という概念によって引き継がれている。

構造カップリングは、これによりかなり広い概念となったものとみられる。その課題が、社会システムと人間の関係をはじめとして、社会システムと他の社会システム、更には自然という多次元的な関係として、システム、環境との関係を守備範囲におさめるという意味ではルーマン理論におけるシステムと環境関係に関する一層総合的な概念となったものとみられている⁽⁸⁾。

(2) 意識システムの環境配慮とオートポイエーシス

意識システムは、絶えず生成して消滅する出来事としての思考を更新して、それが継続的になされることによって、自らを自らが構成している一つのオートポイエーシスのシステムである。意識は観察を通してみずからの活動をそれ自体に示しながら進められる過程として捉えられてきた。意識のオートポイエーシスとは、明確な思考を次々に作り出していることになる。意識システムの活動には APE 的なシステムの特色である活動の閉鎖性がみられる。

情報が外部からそのまま簡単にもちこまれたり、外部にそのまま持ち出されたりすることはない。その意識システム自体の自律的な力関係のもとで、その意識システム自体に先立つ思考や表象に接続している。そこで、システムの閉鎖性が問題となる。

それぞれのオペレーションの閉鎖性が、先行するオペレーションに接続することを通してそれ自体を新たに再生産するというシステム自体の自己構成の自己準拠的な閉鎖性のことである。意識システムのオペレーションの閉鎖性ということもまた、その一例にほかならない。

その働きは三概念で提示されている。すなわち、情報、伝達、理解という選択の三つの選択を構成要素とする統一体である。

情報は、新たな期待や刺激が加えられることで活性化すると考えられる。新しさや予期せぬことが新たな情報として伝えられて、刺激をうけることとなる。

伝達は、情報の意味や特別な伝え方において受け手に刺激を与えるように作用することが肝要となる。たとえば、他人の行為も通常の行為手順であれば何らの刺激もないが、人間の行動の変化には、人間の意識の変動が込められている。ふとした以前とは異なる活動があれば、情報の多くの受け手は何らかの関心を示すものとなる。伝達の仕方には多くの意味が込められるものとなる。職場の習慣に対する賛同、抗議、反対などの多くの意味が含まれる。こうしたなんらかの情報が伝えられて、情報の受け手により、それに対する対応策がとられることで、コミュニケーションは活動し、継続するものとなる。情報伝達において受信者の体験のみではなく、他我に対する鋭い観察こそが、もの言わぬ行為者の行動の意味を察知できるものとなる。

(3) コミュニケーションと環境への依存性と働きかけ方

問題は、オートポイエーシス（APE）がいかに環境と結びついているかということである。APEは、閉鎖的であり、いかに環境問題と結びついているのかという問題がある。

それには、二つの問題が登場する。一つはコミュニケーション内部の課題である。それぞれの機能と活動とのかかわりである。他の問題は、コミュニケーション・システムとの関係性である。自らのオートポイエーシスと知性との関係を維持することが求められている。これらの困難な課題に対する答えの一つが構造カップリングだとみられる。

(4) 構造カップリングの閉鎖性と意思決定

閉鎖的で自律的とされるコミュニケーション・システムは、環境との関係性にはいかなる特色があるかが問題となる。構造カップリング概念はAPE概念の創始者であるマトラーナに由来する概念であるとされる。

ルーマンによれば、この概念、すなわち、オートポイエーシス・システムが目指すのは、それ自体のオペレーションの自律性と閉鎖性にもかかわらず、それがいかに環境との結びついているのかという問題である。すなわち、コミュニケーション・システムに関する構造的問題はその自己準拠的な問題に閉鎖性という条件のもとに如何に環境とのかかわり合いを持つかという点が重要だ。こうした問題は、次の二つの分野において配慮されるものとなる。

第一は、コミュニケーション内部の問題である。そこに貫徹する秩序像が課題となる。

第二は、コミュニケーション・システムと他のオートポイエーシス的システムとの関係性である。細胞、神経システム、意識システムのAPEシステムをも破綻させないような関係を如何に形成するかという問題でもある。一つの意識は環境の多様な課題を解決するものとみられる。意識のみがその広大な環境からの刺激を受けてその中で方向転換に踏み切れるのである。

(5) コミュニケーションにおける意思決定

コミュニケーション・システムにとって、意思疎通過程と並んで、情報収集の過程では様々な物質的心的過程とが同時に生起していることがみいだされる。そこでは、コミュニケーションが刺激された時にのみ内部に変化が起こることとなる。内部への刺激が変化を起こすのである。コミュニケーション・システム自体の物質的環境に対する自律性独立性の根拠が、コミュニケーション・システムの自己準拠にある以上、コミュニケーション・システムが自らの心的、有機体的、物質的な環境についての知見を得て、かつそれについて何らかのアクションを起こす。あるいは、起こさざるをえなくなるのは環境のなんらかの事態によりコミュニケーションが刺激されたときである。ルーマンは、その際の意識がコミュニケーションと心的、有機体的、物的に新たな刺激になるとしている。

(6) 理解の劇的变化：期待の変化と刺激

構造カップリングに対するシステム内部で対応する概念が刺激である。刺激は、それぞれのコミュニケーション・システムにおいて予期せぬこと、攪乱、期待外れ、などの状態として生ずるのであるが、そうした刺激は構造化している期待が形成されることが前提と

なる。期待構造が形成されていないと出来事がコミュニケーションの過程において予期せぬモメントを伴って情報として生じたり、コミュニケーション過程におけるしかるべき接続のパターンが裏切られて、コミュニケーションが攪乱されることはないからである。

期待はコミュニケーション・システムのオペレーションの可能性の範囲を限定することを通して成立しており、それはコミュニケーションにおける限定された働きにほかならない。コミュニケーションの期待構造は、オペレーションの可能性の検定を行なう一方で、同時に次のような効果をもたらしている。コミュニケーション・システムの構造には次の二つの働きがでている。

第一は、コミュニケーションのオペレーションに蓋然性の高い可能性の範囲が設定されている。

第二は、可能性の範囲が設定されることで、そこからの差異が新しさであり、離反的なものであれ、コミュニケーション・システムが感知されることが意味をもつものとなる。

こうした予想や期待に対する差異に対応して通常との格差を感知して反応が起こるのである。そうした変化を通してシステム自体のオペレーションのネットワークにもとづいて、システム自体によってさらなるオペレーションへと変換されることとなる⁽⁹⁾。

(7) システムの自律性と環境変化の自己認識

構造変動の途上でも、コミュニケーション・システムは、それ自体の構造にもとづいて自律性を保持しているということである。それは、刺激や情報はそのシステム自体の構造を手掛かりとして感受された差異のことだからである。

その意味で、コミュニケーション・システムは、環境とのかかわりにおいてそれ自体が変化する場合においても、そのシステムの構造にもとづいて、一貫して自律的でありうる。コミュニケーション・システムは、先行するコミュニケーションに新たなコミュニケーションを自己準拠的に設定させていく自らのオペレーションの遂行において、そのシステム自体の構造に寄与しながら次々と生起する出来事を感知している。そうした出来事の連鎖が、コミュニケーションの構造に変化をもたらすこともありうるのである。

既存の構造によって感知した刺激により既存の構造が活性化されたり、それが廃棄されて、新たな構造が形成されるという動的なプロセスがコミュニケーション・システムの生きた環境開放の機能そのものをなすということとなる。

(8) 期待形成の意義：環境変化とオートポイエーシスの活動

期待はコミュニケーション・システムのオペレーションの可能性の範囲を限定することを通して成立している。期待はコミュニケーションにおける限定の働きも示している。

コミュニケーション・システムにおける期待は人間の活動の限定を行うと同時に、期待が形成されると、出来事がそれに反した場合には、期待の攪乱を起こすという効果が生ずる。それは、二つのことを意味する。一つは、コミュニケーション・システムに蓋然性の高い可能性が設定されることだ。第二は、可能性の範囲が設定されることで、そこからの乖離を発見するという機能である。こうした差異を感知することでコミュニケーション・システムは刺激を甘受することとなる。すなわち、構造カップリングがオペレーションを生み出しているのではなく、システムへの刺激すなわち予期せぬ出来事をうみだしている。

そうした刺激はシステム自体のオペレーションのネットワークにもとづいて、システム自体により、さらなるオペレーションへと転換されることとなる⁽¹⁰⁾。

(9) 求められる行為への配慮：ルーマン理論の補完

構造カップリングとは、ルーマンにとっては構造の選択制に基づく刺激の感受をとおしたシステムと環境との選択的な相関性である。それだけでシステムと環境との関係性の説明に充分といえるのではない。それは、コミュニケーション・システムの選択的な環境相関性のことだからである。

社会の活動は、コミュニケーションだけで十分ではない。コミュニケーションは社会の活動の一部であり、それだけでは社会全体の説明とはならない。人間の活動は社会活動のかなり多くの分野を網羅しており、コミュニケーションはその一部に過ぎないのだ。

人間はあくまでも社会システムの環境を構成するメンバーであるに過ぎない。コミュニケーションも社会環境の一部にすぎないのである。社会の中では、その一部分を構成するに過ぎない事とルーマンの軽視した「行為」の役割を見直すべきことが銘記されるべきである⁽¹¹⁾。

第5章：心理システムと意識のオートポイエーシス

社会システムを意味構成的システムの一つの形態として捉えて、それをもう一つの形態たる意識のシステム（心理システム）と並列対比させるという捉え方に、表示されてルーマンの発想の一部が提示されている。ルーマン理論は、社会システムと意識のシステムとは互いに不可欠な環境として相互に侵透する関係にある。しかし、それだけでなく、何よりもオートポイエーシス的な意味構成的システムとして同類のシステムなのである⁽¹²⁾。

(1) ルーマンの意識に関する捉え方：意識のオートポイエーシス

ルーマン理論における人間と社会という問題設定における二項的構図は、心理システムにおける意識と社会システムという問題設定に置き換えられる。それは、より一般的に考えれば、人間の存在は身体的なものとして存在しており、それを心理システムに限定することには無理がある。ルーマンも人間を心理システムだけに限定せずに総合的に把握しようとしている。ルーマン理論の最重要課題は、人間の意識とその意味であり、意味構成的システムを分析の対象としてきた。そこで意味を持つのは、意識の構造と社会システムである。意識は、自己中心的に、すなわちオートポイエーシス的に再生産されるものとなる。

まずは、意識の形成は人間の脳裏にぼんやりとあることが表象として意識されるものとなる。それが徐々にしっかりとした輪郭を持ったものとなる心理システムとなる。表象は統一体として、完成度において輪郭がよりあいまいであり、潜在的に可能性の豊富な表象と輪郭がより曖昧で潜在性の豊富なもの、すなわち想念と観察される特色が明確で前後の接続が明確な表象との区別があるという。

システムの更新に基づく要素としての個々の表象の加工はシステム全体の観点からの調整作用である以上は、要素の基底セルフ・レフェレンス（自己点検）の一時的流動的な在り方に比較して持続的固定的である。ルーマンは、システムにみられるそうした持続的、

固定的な局面を構造として把握する。しかし、構造の持続性もあくまでも相対的ものといえる。その性格も環境に対応して変化するものとなる。このような再編成の仕組みをもったシステムが、オートポイエーシスのシステムとなるものといえるものだ。

(2) 表象から意識・知覚と意思

オートポイエーシス的なシステムとしての心理システムは以下のように記述される。はじめに外界に関する知覚体験を通して人間の内面に生起する多様な想念が体験の蓄積に伴い、次第に細分されて、より明確な表象へと加工される。そうした表象が接続して連関することにより構造が形成される。構造の形成は更なる表象の産出を容易にして、外界把握の形式として妥当な表象システムの構築を促す。表象の妥当性が再確認されて、外界との差異体験もフィード・バックされて、知的ストックの形成に資することとなり、システムの内容を豊かなものとする。

心理システムにおけるオートポイエーシスの基本形式は、個々の表象の自己認識が下地となり、その基盤の上に、環境との間の閉鎖性に立脚したシステム全体の相互関係が覆いかぶさるように作用して、要素としての表象とシステムの構造との両局面が形成され、それらが引き続き再構成されていくというものである。ルーマンのいう意識とは、以上のような心理システムにおける表象産出の自己中心的な枠組みが中心となることである。

(3) 意識とコミュニケーション

社会学では意識の扱いが手薄であつたことから、その記述が有意義となる。意識のオートポイエーシスは社会システムのオートポイエーシスとの比較対照の関係で意義を帯びてくるのだ。

コミュニケーション・システムにおいて再生産される言葉や生き方のモデルが心理システムの表象の産出を誘導して、自己学習過程として心理システムの構造形成に寄与するというのである。ルーマンは、この論点を初めとする問題領域について相互浸透というテーマのもとに議論する。

社会システムは定義上、個々の構成員の意識から成り立つのではない。社会システムそれ自体があたかも一つの意識であるかのように把握されるのである。すなわち、要素としての表象と同じく要素としてコミュニケーションも、意味の指示作用のミクロな統一体である。そうした統一体が基底的な自己連関によってそれぞれの意味を確定、接続して複合体となり、プロセスやシステムを形成していく。つまり、上位の自己連関としての反応の発生である。そうした反響と熟慮（リフレクション）が作用することにより、システムと環境の差異が観察され、要素間の接続関係が一層明確となる。

(4) 人間行為重視によるコミュニケーション論新展開

ルーマンの研究では人間の心理や行為に関する記述は必ずしも多くはない。むしろ少ない事が問題となる。意識もコミュニケーションも現象を意味付け、観察対象を構成する決定的に重要な要因である。それは、意識とコミュニケーションの適切な分化とその対象構成能力を飛躍的に向上させた。とはいえ、現実はかならずしも意味構成的システムのみ還元されるわけではない。社会システムの要素の構成は意識とコミュニケーションには限

らないのである。オートポイエシスの視点は行為や社会的事実を含めた多元的複合的構成体にこそより適合的である。

そこで、行為こそは、そうした事態を構成する要素的な統一体として位置づけられるべきである。ルーマンの行為理論はコミュニケーション・システムの水準を強調するために過度に限定され、現実には、矮小化されているものと考えられる。行為が人々の活動によって編み出された多元的に構成された表現形式であるがゆえにオートポイエシスの視点は有効なのである。ルーマンの理論には、今後は行為に関する記述が一層補完されるべきであろう⁽¹³⁾。

課題：組織における意思表示

ルーマン理論は独特の発想に溢れていて、かつ難解である。そのうえ、理解力の乏しい筆者による解説でルーマンの真意は読者の方々に充分には伝わらなかったものと推察される。筆者の理解力の不足を詫げるしか道はない。たとえば、自我と他我の間の区分、自己準拠、意識と心理のオートポイエシス、理解、そして構造カップリングなど常識では聞かない新たな概念が次から次に飛び出してくるのがルーマンの解説である。その上、常識とされている情報移転、推理や行為などの十分な説明が欠落しており、その発想の独特さに加えて言葉使いも馴染の薄いものである。

このような難解な発想と用語を用いた結果としてそれだけ理解不能なコミュニケーションということが、ここでさらに極めて困難な課題であるという事が印象として残された。

(1) 官僚制、資本による弱者支配

人間の正常な意見交換を妨げる多くの要因がある。たとえば、利益優位の供給者精神とか、人間を抑圧することを社会的な使命とする官僚制、パワハラを生き甲斐とする組織における経営者の役割などが、人間の正常な意思疎通を妨げてきた。こうした分野での人権侵害が如何に強いものかを確認するための研究が大きな課題としてわれわれに残されている。真に人間のコミュニケーションを推進するためには、今後は、こうした分野の深い研究が重要な課題として残されている。

資本主義と官僚制によるコミュニケーションに対する侵害と個人の生活を左右する個別組織の原理、すなわち、組織の階層制と個人の意味疎通の歪みなどの研究を進めることなくしては、正しい正常な人間間の意思疎通は考えられない。コミュニケーションの研究にとって意義のあることは、資本主義と官僚制が如何に通常の人間の意思疎通を妨げているのかという課題と個別組織における意思決定に関する個人の活動とそこでの権利確保の方法を研究することである。国家と個別組織による人間個人に対する抑圧と制約を研究することが人間の生活とコミュニケーションの正しいあり方を解明することにつながる。

(2) 個別組織における意思決定の現代化：命令方式変更と新リーダー養成

特に、個別組織における意思決定とそこでの個人の役割りを研究し、そこでは個人の自由な意思伝達が階層制で如何に妨げられているが研究対象となる。

経営学の分野における組織の研究は現段階では、特に遅れている。企業経営における会

計学や、労務管理論などの研究はかなりの進展をみせているが、人間の意見交換に関する理論は、かなり研究の遅れた分野に止まってきた。組織における意思決定の研究とそこでの参加者個人の意見表明の権利に関する研究は、組織の命令系統の研究やリーダーの意見交換の在り方の研究と共に、研究の特に遅れた分野である。また、日本の組織における個人による過剰な忖度の在り方が問われている。日本人による過度な組織に対する忠誠心とボスに対する忖度の研究は、日本型組織研究と併せて、コミュニケーション論における残された重要課題となっている。

[注 釈]

- (1) 佐藤勉 (1997年) 『コミュニケーションと社会システム：パーソンズ、ハーバーマス、ルーマン』 恒星社厚生閣。

影山僖一 (2018年) 「自己中心性の人間に対応した教育理念—コミュニケーションとより良い人間関係」 千葉商大紀要, 第56巻第1号, 2018年7月。

@オートポイエーシスによるコミュニケーションという発想の解説

過去の筆者の論稿においては、オートポイエーシスについて若干の解説はされているが十分ではない。ここでは、ルーマンの発想の特色である自己中心性によるコミュニケーションの個性的な発想を簡単に紹介するものとする。

生物としてのヒトは他人とは孤立した存在であり、その活動は自己の生存に向けた欲望充足のための配慮で占拠される。まず、自分の生存に必要な食糧を確保し、さらに、子孫を残すために異性を求める。その言動は自己生存のための活動が最優先される。ここでは、人間個人の徹底的な自己中心性と自己完結性がみられる。やがて、ヒトは他人の協力を効果的に得ることの重要性を認識して、他人との意思疎通、すなわちコミュニケーションの方法を真剣に考え始める。コミュニケーションはオートポイエーシスである人間にとり生存の不可欠な手段である。ここでは、当初の自分中心の発想と言動である自我に反省を加え、他人の発想と行動を徹底的に観察の上で自我の意思を他人に伝達するために意思疎通の方法が真剣に配慮されるようになる。他人の心理を推察して、他人の賛同を得られる言動と自己の行動戦略を真剣に研究する。他人の意向を観察し、理解する段階で、相手の意向を聞く以前に相手の意向を理解する方法を研究したのがルーマンの発想である。

以下の項目に留意して頂きたい。

- (1) 他人の観察、理解、共鳴と反発、構造カップリング、環境との相互浸透
- (2) 自己理解による仮説から他人の観察と理解
- (3) ヒトはヒトにとつての環境であり、ヒトは社会環境を形成すること。
- (4) 他人の行為のすり合わせでなく自己と他人の発想の徹底的な観察、理解が優先される。

ここでの記述の前半の趣旨は、筆者による過去の論考に提示されている。

影山僖一 (2018年), 「自己中心性の人間に対応した教育理念—コミュニケーションとより良い人間関係—」 千葉商大紀要, 第56巻第1号, 2018年7月。

- (2) Edmondson, Amy C, (2012), *Teaming: How Organizations Learn, Innovate and*

- Compete in the Knowledge Economy*, Hoboken, NJ, US, John Wiley & Sons, Inc.
野村智子訳 (2014 年) 『チームが機能するとはどういうことか』 英治出版。
- (3) 村中知子 (1996 年) 『ルーマン理論の可能性』 恒星社厚生閣。
 - (4) 佐久間政弘 「社会システムの形成における自己準拠の問題：ルーマンの社会システム概念について」, 佐藤勉 (1997 年) 『コミュニケーションと社会システム』 恒星社厚生閣, 254-274 頁。
 - (5) 佐藤勉監訳 (1993 年) 『社会システム理論 (上巻)』 恒星社厚生閣, 56-57 頁。
小松丈晃 (1997 年) 「コミュニケーションにおける「理解」の問題」, 佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム』 恒星社厚生閣, 293 頁。
 - (6) 小松丈晃論文, 297 頁。
 - (7) 小松丈晃論文, 306 頁。
 - (8) 高橋徹 「構造カップリングの問題性」 佐藤勉 『コミュニケーションと社会システム』 恒星社厚生閣, 310-312 頁。
 - (9) 高橋徹論文, 319-327 頁。
 - (10) 高橋徹論文, 312-317 頁。
 - (11) 高橋徹論文, 328-330 頁。
 - (12) 村田裕志 「意識のオートポイエーシスをめぐって」, 佐藤勉 『コミュニケーションと社会システム』 恒星社厚生閣, 336-353 頁。
 - (13) 村田裕志論文, 349-351 頁。

(2020.1.9 受稿, 2020.5.28 受理)

〔抄 録〕

本稿は、人間の間における意思疎通の困難さを明確にしたドイツ人の社会学者であるルーマンによるコミュニケーションに関する業績の解説を試み、人間間のコミュニケーションの正しいあり方を探求し、今後の重要課題を提示しようとするものである。人間間の意思疎通は、社会における人間の共存と協力関係にとり最も貴重なプロセスである上に、従来、良好な個人間の意思疎通が当然に推進されているものと誤解されてきた。しかし、最近に至り、人間間の意思疎通が本来は極めて困難なことであり、しかも人間間の意思疎通が正しい形式を踏まえては行なわれることはないという指摘がなされている。ここでは、ルーマンにより提示されている正しい手順を踏んだコミュニケーションの在り方を紹介し、今後の課題を提示する。

(1) そこでは、自我と他我、自己準拠、他者の徹底した理解、構造カップリングと相互浸透、意識と心理のオートポイエーシスなどという何とも理解の困難な概念が提示されている。そうした難解な発想と用語を用いた解説で初めて正確な意思疎通が出来ると提案するのがルーマンである。それは、同時にコミュニケーションが極めて困難な課題であり、現実には正しく実行されることが少ないことを物語るものである。

(2) そのほかにも、人間の正常な意見交換、すなわち、コミュニケーションを妨げる多くの要因も他の社会システムの研究者により指摘されている。たとえば、利益重視の供給者精神とか、国民の抑圧を社会的な使命とする官僚制などの人間行動を規制する多くの権力が個人間の正しいコミュニケーションを抑圧してきた。それはハーバーマスにより国民生活における意思疎通の植民地化として警告が発せられている。加えて、最近、日本で声高に非難されている個人の職業生活の基盤となってきた個別組織におけるパワハラを生き甲斐とする組織における経営者の欠陥などが、組織のメンバー間における正常な意思疎通を妨げている。今後は、こうした分野での人権侵害を如何に抑制するかを確認するための研究が大きな課題として残されている。人間の間での情報交換は、本来は、平等な関係の下で、自由な立場での意思疎通が理想とされてきたのだが、今後は、真の自由で平等な人間のコミュニケーションを推進するためには、こうした分野の一層深い研究が迫られている。

(3) さらに、意思疎通の手段となる用語と言語の不完全性が正しい意思疎通を妨げる大きな要因となる。今後は、関係各位の努力で人間間のコミュニケーションのプロセスが徹底的に点検されることが期待されている。コミュニケーションの正しい遂行方式は、意思疎通の正しいシステムとして明確にされており、さらに、人間間の平等で自由な立場で行われる理想的な姿が今後は、ルーマンやハーバーマスなどの学説を参考として明確にされるべきである。また、今後は言語の正確なあり方の解明と人権尊重と共に、ルーマンの指摘するコミュニケーションの正しいあり方が推進されるべきであろう。